風俗文選犬註解

壹

へ5
5639
2

門へ5
號 5639
卷 2

冊 五
號 歌
函 十

風俗文選大註解巻之壹

葎雪菴千心門人
葎日仏我著

江都

柴門の辭

芭蕉翁

送レ帰二許六之故郷一餞別之文也

去年の秋かりそめに西をあはせ、こゝろみ日の浮屠源四郎別を惜む其別なのこゝろみをひとり草廬をこゝろ、宗鑑をなす、

元禄六年卯月なり同く六日のとろ旅立人とかつらかりにあるとき例の洛郊無名を使こゝを後の旅ら蔵と本号称をなして其一文をなる五老井を志ゝ哀根の諸士まるく對面せんをを常く別ふ必ず人を送ふすることなりとこまやかに和したるさく画賛の類をも捨る程離別の情深こゝとを餞日をとゝ移ん所ろを志ゝめかさゝして詞ちを法てるものとなるものけをよせられうを移風を名餞別あり

其朝

あるじとなりて旧里に帰る人に森川氏許六といふ者あり風雅に情ある人にてところどころに足をかけ草鞋に足をいため破笠に霜露をいとひて己が心をやぶりて物の実をしる事をよろこぶ今仕官おほやけのためには長剣を腰にさしみ棠かけのうしろに鎗をもたせ出入の従者の黒羽織のもすそハ風にひるかへしたるあり様此人の本意にはあるべからず

椎の花ころにも似よ木曽の旅　翁

うき人の旅にも習へ木曽の蝿　〻

餞別

笠握るや青くしほるゝあやめ艸　杉風

馬嘶く跡もさかゆる青田かな　桃隣

木を流しくもりてすゞしさよ　百里

殺のなさけを又かこつけて旅衣　支波

青草にあくびうつさむ駕の者　孟遅

汗をうつるのけしきや諏訪の湖　実石

身の隙をまつ甲斐のいちこ時　陳田

冨士溜月中にかけはし節々　隣郎

いぬ氣しき梅の形見や夏の月　日鮮

夏山の形にうすれぬ別かの那　達化

餞　許六

枇杷の大臣の扇の風を生の松原によせられたんむかしの賜別におもひ合せて何かよせんと思ひつかれの狂句

別まで扇で翁の餞をこのむ　其角

主人既賞の志をせめて一日に画一枚を従僕に所望す

あを旅をやすましき味をあれこれ　〻

文選十六　別賦　江文通

黯然トシテ銷レ魂者唯別而已矣　同　攀ニ桃李ヲ兮不レ忍レ別

かりそめハ一入の思の浅きなり　旅立人に物を送るをはなむけといひ

古言にハ旅の鼻むけとて旅立人に酒肴をすゝめて旅人の乗る馬の

はなを其旅人の行べき方へ馬の鼻を引むけてやる心ばへよりはなむ

けといふ火打袋幣（ヌサ）なと送る事古歌に多し

後撰集　みちのくへまかりける人に火打袋をつかはすとて
あかつきにおきてくる火のおもひあれは心きえぬとおもふ　なかに
八雲御抄に小刀さしたる事は腰刀なり火打をつくる
ものゝかたちにて今の世の人のさする小刀をさしたるとつかへり
鼓忠集　親盛法師の使はいつくに金の火打と火鑽と諸をすりける袋に
おつけにおもひ出つやと古里の事のみ思ひてすりけるなりけり
公忠集に田舎へくたる人のかたへ白き袋に青き物しを摺て火打を入てやるとて
おもへてはおもひ出よと吾宿の事のみ思ひてすれるなりけり
昔の本書紀に式に美濃国恵奈（エナ）郡恵奈（エナ）の神社坂本の神社あり昔は
此のみにて此歌よりさきの比坂をとゆる今恵奈（エナ）か嶽（タケ）といふ大きなる山也
此歌よりの比坂をこえて信濃国伊奈郡阿智（アチ）の駅にいたりしに
京伏見家はきこゆるに此坂を経て阿智の駅にいたる道也のちに木曽
路開けてよりは此坂をかよひしをいつのかとよりか此道たえて
今は木曽路をかよふるとかや本の名は倉科保科（ホシナ）（トナ）此科仁科更（サラ）科
なと云まてふ地名あまた一説に古なとゝいふ本ありもとへにいはゆる鬱（ウツ）色

なりきはしきものに木を以てつくるなり其皮をとりて布とす
とも云り又此木の皮をはきて糸に綿につくり衣とする紙をもせり
信濃国に生るは殊に白くいつよりか名産となれり神楽歌に木綿（ユフ）
つくる科の木をとらえて今級布布とも布ともいへり
土佐日記に　船のうちなるのみなむけとて
其器（ウツハモノ）画をも好み風雅をも好むものはありて絵も何の為に好むや
風雅の為に好むといはゞ風雅は何の為に好むやいはゞ其学の一なり
二にして用をなすにも一なり微や君子も多能を恥といへれは品二なるを
用一なる感じはまさや画をとりて其師として風雅をもちひてなす
とすれはさしもの師の画は精神（セイシン）微（ビ）に入筆端（ヒツタン）妙をふるふ其幽遠なる
ものあるは其風雅にも妙なる扇の如しなにとさらに見るなり
精神微に入筆端妙をふるふ　荘子曰　筆端鼓（コ）舞筆端微妙（ビ）
鼓之舞之以盡（ツクス）神　筆端は筆の末といふ近の意なり筆頭とも
いふ又同じ韓子外傳に君子宜（ベシ）避（サク）三端文士筆端武士鋒端力士舌端
十列冷物筌記此延の月此延の扇団扇水老女の粧　女の

酔へる胡人の老たる法師の弾筝無酒神楽勅使なとかきて讃するといふ仏の画
共釈阿西行の言葉のかゝりをあまりにもちかきにより能なるものゝかけるへき
ありけるを院の御かた後鳥羽上皇のかみせ給ひしものゝまなこにはらいて御歌を
書かせてまいらせんとかつは思ひたまへしのみ侍りしとかや

皇太后宮太夫俊成五条三位と号安元二年九月十八日
出家法名釈阿元久元年九月晦日薨九十一歳

俊成九十賀記　源家長

今年三位の入道は九十歳の齢にみち侍る此道にかくれなき人の今の世に
詠みたるしともあまたありけるに此道の比類には今まで聞えつるにも
けるためしも今は九十になりてはすこしもおほつかなきもかゝりしとてかきとゝめたる
らむ末なりけるとも世のためしにときとゝめ果させんとおほしめして光孝天皇の
御時花山の僧正を仁寿殿にめして賀をたまはれる例として和歌所にて賀をたまふ
へきよし仰せ下さる霜月の廿日あまり三日と定められて中院和歌所のおもてに
よそひて御堂とて西の壁の上に摂政殿太政大臣まうのほり給ひて公卿さ
ふらひに皆参衣冠上人は束帯入道もまうのほりて新三位定家卿侍る

助けられてまうのほるたよりもすくなく老はてにしたかひて心をすましたる世にあまたかくれ侍る
はなふとまぬかれるとあはれにおほしけるにや昔の人の侍るさまなけれと又これのか
うやてひとかたならぬを今の人のすくひを老ていの御世侍りしこと物のよそ也かく
ましならし杯の数をさし参つゝすることも猶またひとたひ賀を
安元二年長月廿日あまり心地例ならて御賀をとて七八日かきくらしたまへる
候れは出家はとくすへき由皇太后宮大夫辞し申すをたゝ大将のおとゝ
消息つかはし侍るとてよみてつかはしける歌
むかしより秋のくれをはをしみしにことしは我そさきたちぬへき

かへし　大将
きみそ猶心ありても思ひけむ惜しむなかれと秋をそおもふ

四位の時歌よみを伊勢の内宮の歌合にて判者仰けてのち中御門きさいの宮
の歌合にておなし心ありて彼お時はなほ判して世にかくれなく人はもてはやし
つけて侍るをに具して文治河内広綱とかや山寺にてつくりける
おとろきてはいまきつらいしまかせの心のうちにつかひ侍りしにそのち
すくしつゝ年の暮の比京にのほりてもやしつゝ二月十六日に

かくれ行ける彼上人をしのびさうらの歌なくよみけるに
おのれらは花のもとにて我死ん其きさらきの望月のころ
かくよみおきし事をおもひしくとのひしまつねに二月十六日の日終よけ
りとみえありけるよみたりくかはひ人かきつけける
別ひおもし花のもとにてちすの上にたくはさらなん　俊成
西行法師うの申けるかたかなの賦又西行の讃するにはしくのせたり
後鳥羽院　高倉帝第四皇子　諱尊成
後鳥羽院御口傳云　俊頼ののちには釈阿西行俊恵あり釈阿
はやさしくえんに心も深くありけるなる所もありき殊に愚意に庶幾する
姿なり西行はおもしろくて心も殊に深くありけるありかたくも出来し
かたき方もともにあい兼て見ゆ生得の歌人とおぼゆ　よのつねにてお
ぼろけの人まねびなどすべき歌にあらず不可説の上手なり
されば此御言葉をかりし其細に一筋をとるとどうけにはあらずなれど行ち人の
跡をもとめしなく人のもとめける所をもとめよと南山大師の筆のあとにもみえ
くら風雅すみ道に因みひて衿をかけて柴門の外に送りを引るのき

南山大師　白氏文集四十一
波離滅有二南山大師一得レ之南山滅有二景雲大師一得レ之
元亨釈書弘法大師の御事をいへるくだりに南山數傳而とあり
撰集抄にも高野大師の御詞とてまうけれる蓬萊にまいりしければさめさるよはおのつから
来しといひて誠なるかなやあはれにかくのごとき人は深く常に世のさかさることはも
行ものの為にも我心をとらるるなはあいのまた志せんとするすでにも常に時をすし
今我も南山大師は白氏文集に出る祖師をいふ又高野大師をつかふといへり元亨
記するに高野辺のさるなをいふ所には南山とも南方ともいへり
釈書にすれは高野大師の御事とすへくなり後の人考て補ひのそし
許六か江戸よりやりて御つきといひくれるよしにつかはしける
春の山のきさひや人をも待り哉　李由
かつし
行の子のかくるきほひ空抱くの露　許六
許六は彦根井伊家にて三百石のなる侍也此時江府勤番にて糀町喰
違御門内御中屋敷よりの此元へいとなみかりて御る折のつまの子むけるく

此部分は許六の部をあつめる時はさきまて
　　私の句に表の章をつゝ中略しら　義
此部分の中柱元禄のむしよりの水なるしの紙なるく存て今まあり先の
年大寺の命にて其中柱をぬきとりの出元度根の出城へうつさるれは
さる者物をもし大の金ひあてはて此ぬ玉へめさん其海へ又柱を補ひ
今より此四里為其ます為蕉柱とかける類を其はしらへかけ為てもの
除物なく識よめてこれ部をつくる八十余の池金の出ひ
分我ら業門待を文選の巻頭より許六ふ為はら識に明眼至め
といひつはしいにとすれハ文故の内ハ人の跡をとりとめ人の
求ふるをもとめすて南山大師の筆の道をえゝとふ人今
筆力古今よりて教道の専要芭蕉翁の老婆心を後世及
ふ〻なりと許六の眼力誠に仰き為むへき文章也祖翁
の謬風後世流行せら此道を拙者年〻歳〻に増て後行類
につゝ時〻一時流行の洒落に流れて道の本意を失ふ
ふ為ふ〻さうふ為時ら此章自為とも心つく人為ら

為ふ方人は一人心つく人為ら跡をもとめ古人のもとめ為る
為をもとむるはいにハ我が意なりとの文章也
古人の文章又ハ發句は先達註紙をかゝふるとは
此本戸や鎖の さゝ至て為の用　其角
平家物語旧都月ゝの つゝ
徳大寺左大將為の ゆのゆりを手さゝ八惣門ら鎖のさゝ
白氏文集　二十　　梅　白　しゝ　きのゝみや　鶯を　為
句留　醉客　夜　側　個〻　倚（ヨヽエテユク）　將　虚　白　堂　前　鶴（ウシヒを）　失　劫（ヨル）
樟亭　驛　後　ノ　梅
　　よしのゝて
　　山　さゝゝ　　為ふくゝ　　ものまつゝ　　為
　　芭蕉　白集　山　為花
　　為ふ　後ある　為ふ　為ふ　為ふ　為ふ　為ふ　為ふ　為ふ　為ふ　為ふ
　　ゝ　ゝ　さを　我為ふ　ゝを　為ふ　為ふ　為ふ

回東の道の記　えどけるさるの年かくりて冬十月往まうのぼる

以心傳心無一物

ちはや　地水のこと

かくの如く詩和歌物語の類に出て後人心ろゑて注釈は
百人其心ろ行くの發句は行くの證歌證句を以當初心をさとる其自
を解するつゝるに其源をさとるのみにて古人の歌をあはれ心をつけ
見安人祖翁のいつのよ動けるを古人のよとあるを
あるは見て句をつくらんとまうす宗鑑貞徳の風を一変して天下往歩
の一風蕉風を立るより弱ら百家衆氏まうす博学多識ゆきしく草
傳直示ゆ悟入して其作意元ゆく

五老井先生家譜

宇多天皇九代孫佐々木源三秀義六世堀部四郎宗綱十代目堀部與郎氏義長子
森川金右衛門源氏後其姓江州郡洲森河原住人永禄七年始
德川家隨身　大神呂御撰之男士武十人之隨一也
森川八左衛門氏重初名銀之助氏後三男御祐本奉仕賜八百石

同與治左門厨重親初名銀太郎寛永元甲子年
井伊正四位上掃部頭直孝被召出知行貳百石
同與治左門假令又重宗天和二年百石加恩宝藏院流鎌十文字鎗之名人
同五分百仲初金平又兵助領三百石
正德五乙未八月廿六日卒法名五老井無無道無居士菊阿佛
森川氏之子孫今井伊侯家中之連綿タリ

猿ゝ　花と咲る多ら西念ゝ衣著ゝ　元郎
あるの酩　著ゝ

分我ゝ酩豆の二字よみかゝるなを付てすきと世上よみ出すく
きとつゝみいゝるる物ゝ郎ゝるる人ゝ有る人ゝ本百家ゝ豆漬の如き物
にて著の物ゝ見ゝいゝ先著ゝいゝ当の読ゝ分我ゝ年本
号物ゝ二字なる旅行せゝ其ゝ酩ゝ俗ゝ本百人ゝ有ゝ一人ゝ
さるものゝ今ゝいゝきゝ山ゝゝある富高の家ゝ入て酩豆のゝ
つ孫ゝ其ゝ老母あゝ和歌を好ゝすゝ風雅の老翁ゝ
物ゝすきゝいゝるゝ郎ゝ作ゝ物ゝ見ゝいゝ其ゝ

いつる物を取りて酢にひたすに梅の実より似て酸く甘みあり青梅を常に酸きを梅干よ漬てたくはへるとはかりに梅の御ぞ色を青梅の如く梅のごとくもなくはかくくみハ練をこのようにていちどくの実の如くなるを仕すれハ其の内より花咲き実を中をもの出き春三月よりいろ〻実をむすぶ也本草曰中巡谷日あるうるく雪消〻の清津の地よりあるされハ生せぬ本草よりも人未だ聞きふる事の者よりあれハいとゝ物るまかり巡谷いまだ雪消〻さる内さうゝ有なり雪消〻とつれハ諸を咏みて詩るおすり病めまい氣のふさうを安き其外切紙本草八月よりくれハ醫師なれハ出すもの

をあるるを人をなり三月の末実をむすぶ而　酢漿草ハ草なれとくれとさる

ありすもりハ其ふりくる実をむすぶ蔓草なりとゝう花をいるるものなり

ゆゝよ花を咲とのゝ咲ぬひて雪中巡谷のゆめすれハ郎かりとゝうりゝる実を

清ふとつくるもの差の字のを嵩ゝうゝ酢漿草とそすりとよみかみえ孫

のゝうハ字のゆゝすゝきとよりゝうかりとゝとゝはすもりてふりの

其ゝのゝそある〻〻ゝ物の後人稱ゝ考て分我ら考を補ひめゝ書る

後のちゝるるしゝのゝ

飄ノ辞

男鹿ゝく山里と詠ゝる嵯峨ゝく方よりかれる人ありまゝつの元の綜も消る

ゝり夢の系圖出しよ甲冑の鎧ゝ人ハ業刀一丁の刀等ゝまをあまり滅ゝる物

飄草を植てあるゝの筆次ゝ物ゝ書付ゝ

甲ゝるなゝて果ゝる物ゝ色ぶ

なゝき浪人ひゝとゝとゝ物ゝるかの紅ゝ草刈ゝるおのゝとあつまり山甲のゝさゝ

ゝさゝとかつゝとハゝるゝて　かまきゝゝよ俗ゝ小智を笑ゝるゝゝ

源平盛衰記　仲正嵯峨ゝく小智を笑ゝるゝゝ

上京の業平ゝゝ長山里と称ゝん嵯峨ゝく人の秋ゝゝ

さゝゝハあゝゝとゝ物ゝくけん

拾遺集　山紅ゝ秋ゝるおのゝと縄ゝとなゝみ弱ゝるや弱ゝゝものゝゝけゝゝゝ

系圖　文選　為系亂之意　系ハ亂也

あゝゝゝつけて酒巷ゝゝあつて一飄のゝゝひゝ賢人の上里のゝゝゝ

草刈の中ゝゝ兵曹ゝ人ゝゝゝ人ハ許由ゝかゝゝゝとゝゝゝゝ

あゝゝいゝゝ聴ゝ者ゝかゝる者物ゝゝ田植の賣ゝを人ゝ種物の

納め度と思ふ心ありて花を乞ふて来たりて掲焉うつさ
しよせひ源氏の巻の名となり歌人の賞するタ顔そう
つくり草もろもろの詩曲といひつるくさ多きなかにて水
をもてさしけてのこるを見てなりひさことといふものを人のるを世にうらやま
あり所まの後のかけうるを見ぬ嘆かまりて物のつ
古今著聞集 暁行法師の文くまうるに貧とうらやましくなりて水
うつしはあるひとつのうちとくやかりうらん水うみくハ瓢なるう
懸瓢 今人所謂茶酒瓢是也 蒲蘆 今之藥壺蘆是
也壺瓢之屬既可烹煮酒又可爲器大者可爲隻盞
小者可爲酒樽爲要舟可以浮水爲筌可以斟藥
河治之寶有曲沃懸瓢又瓢也中流失船一壺千金是
也 合巹 多四升取瓢中破各一也

五元集 弁の声 許由うひさこ なる青し 芭蕉
夕顔や 白き花 花の形 芭蕉
異端ハ非聖人之道而別爲一端如掃墨是也

源氏夕顔の巻 加の夕顔のふくさけるとなん夕顔を手傳る花の名を人の
てかりあやしきなりの名なり歌人の
同枕草子 六月の夜あやしきまでうすきものハ夕顔のも
源氏物語掃部のるを忠守卿は身作の時雅朝卿
侍人をくの嶋もまるの夕顔の家のあるのの者とも
丹波守忠守卿かつ
心あるとうるくの年侍人まで
掃部の二字諸本の外に限るうるハ只名手といふ意なり
多くの異者よりうるた職事もなくるるもなきをつく
抑夕顔の王樓金屋ときうるる由緒を考ふるに喰物とぐき五条あ
りよ徘徊して貧乏神の神来て是なるつ隠士の白汝字法の物語
を考ふるに茶て曰其 拾遺の瓢も数多き隣人の一命をとるとも全く
瓢の源といふもの かるる日也 ひさこ伝のつくるあん
字治拾遺 物かるるつく

今ハ昔辛ニある女ありけるが其の子その夫をつきて中にて腰おれたるやみたる此姥がありけるを、すなはち大きにはらたちて桶に入れすえんとくはせて飼ひけれバ孫子共姥が命何なく、てをかけたるのちハ世をあつのかうりて孫ありけれバ今は昔の心に似せて殺しやうり、姥ののちになりたるハ孫にいみ寄るもの又本よりえんといふて今ハ昔の物語ぞ桜木日年して孫来て姥の方の寄りけれバ飼ひける者の来る程にやうて出て見れバ飼ひ寄りて彼姥の額を、おもやうて物を殺しけるをとりて見れバひさごの実之を宝ものにめしたるを人をかけりける揃ひてもんとて種つけれバ白粉ありひらくてひさごあまた生りて中に一つおもしろく思ひけれバ白いて世の人を分つ又十あまりにみえて我もとつきし、姥の前にみ業なる此事を隠しにあけける女がら聞きしかりそめにして孫の腰折れたるを見付て此をかんと心かけけれど孫に見ゆる事成ぬたくみて孫の事ありまつり、くま年の冬に居をおける所に孫に一つの孫におさへて夫の付ておかしける姥を乞、して桶に入て飼ひけるのちに暮て殺りける孫の心をもてゆかしくかなしうけんと、十日斗ありて其孫生出てひさごの一つを孫に得させてうれしく思ひて、こなたにつるしておきてあまりひさご七ツ八ツ斗なり中に一つ切て人々にもくはせゆるにくひける八苦き事あるとなえんやうにまして白き事なりけるに

うちロあけるは苦しくてあんぽんのやうく韵気を二三ヶ目色を今をもって、まなつさうんとて孫子はしめ諸くよあつめ桶よそこよと末の人物を用、意ありくしてうれしくおもひてひさごを切て家をくゐさんとしつれバ果はなに、くてあぶとおげくちうまきなんといふ毒の虫ともさらく出て目鼻を向よ、取付て七ツ八ツのひさごよりいづる虫焼くいふよ取りれ孫子ともとりつき、おりあきあまさしりて焼くつきまさしろさけなる

貧乏神　ありける者に生得貧乏の人ありけり何も素ともも借銭の淵、に沈みて浮む瀬なく朝夕のけふりも立かねて身の油かくれ草衣さへ つゞれし、をあちきなく見しれバ世の中をいとふ心の念ぬらなんとおもひきわまりて、他の国へうつり身を立んとて破釜六五器風情のものをひろひあつめ背に入て、明日を出て出ん其の宵すこしまどろみしに肘を曲て休みけれバ夢見に、十八七なる大童髪をみだし赤顔のやうなる肩につぎをかけ縄の帯したる男寄、にて草鞋をつくる事に見馴ぬうさき者を誰ぞと問へば件の、童答て日ごろ方に居しき貧乏神なり此程しのぶ御恩束、のありかたさつき我がら様に供仕るなり其用意よそほしを調る

よの中のうちさめて雨ふる道志のやくをく肩に付くる貧なりける合点

しても甚何に位牢なるを無住禅師のかけるなり

万葉集五　貧窮問答歌　并短歌

かぜまじり雨のふる夜の、雨まじり雪のふる夜ハ、すべもなく、さむくしあれバ、かたしほをとりつゞしろひ、粕湯酒、うちすゝろひて、しはぶかひ、鼻びしびしに、しかとあらぬ、髭かきなでて、あれをおきて、人はあらじと、ほころへど、さむしくあれバ、あさぶすま、ひきかゞふり、ぬのかたきぬ、ありのこと〴〵、きそへども、さむき夜すらを、われよりも、まづしき人の、父母ハうゑさむからん、女こどもハ、によびなくらん、此時ハいかにしつゝか、なが世ハわたる、あめつちハ、ひろしといへど、我ためハ、せばくやなりぬる、日月ハ、あかしといへど、あがためハ、てりやたまハぬ、人みなか、我のみやしかる、わくらばに、人とハあるを、人なみに、あれもなれるを、綿もなき、布肩衣の、みるのごと、わゝけさがれる、かゞふのみ、かたにうちかけ、めこどもハ、あとへに、かくみゐて、うれへさまよひ、かまどにハ、けぶりふきたてず、こしきにハ、くものすかきて、飯かしく、ことも忘れて、ぬえどりの、のどよひをるに、いとのきて、みじかき物を、はしきると、いへるが如く、しもととるさとをさがこゑハ、ねやどまで、きたちよばひぬ、かくばかり、すべなきものか、よのなかのみち

世の中をうしとやさしとおもへども、飛立かねつ、とりにしあらねバ

かゝる佛縁深き坂本に空也上人まで携へられし鉢たゝきの祖師とハなれるかのさゝ波や堅田の海士の海老すくひも佛縁の内ならざるハなき隠士大きに才勝立を洩さぬひ分となりし理屈の論なり偖て風雅を志れる古人ハ生お一瓢の楽しみの後の人さるハ贈るといひ草刈る大臣ぶみといひて上戸の情なり瓢のかわちをいかん瞑候と呪ふとて口のせまきハ何ぞやせまくて餅の入ざるハ下戸のなすけきなると大笑してさつても滄浪の水すめらバつけて添(コロ)くもし濁らバ鱠を押まへしとのひて共よりのいてれ

空也上人の傳ふ鉢叩の辞にあり堅田の延をいへるハ翁の句のうち入なり坐らあらぬ海老にすくふいとなみ海老に佛縁といへるハ蜆子(ケンス)をいへるか身の尾の令と山谷詩　遺(ヰ)金(キン)萬(マン)籯(エイ)常作(スルコト)笑(ヲ)

滄浪之水清(スメラ)兮可(シ)以(テ)濯(アラフ)二吾纓(エイ)一　みとちあるも用し文を用ゆる

逐(ニ)去テ不(二)復(フタヽビ)與(トモニ)言(モノイハ)一

俳友宇夕の辞世　世の中を瓢えんの大慈おさへてすけてつくる

瓢のちからみつるを　峯白集　紫尾

我よひさごの樽あり浦ゆく海士の例て世捨人の果るに八之壮周らるゆてなる

らて紫尾の春をとゝ八法卯玄治尺て色を色する亀海則ゆたる之

かれよ題せよてのみ既よ伊と智し元仔るひそて色よさそふらくい

くき底よ垣ををき重きてよくをとる実よ憶度さ行ろむ一

いうてをのをちるけの亀の尾のをき世よりぬくの清さよ

春風の色ひをすむる者のとよ秋ら知ををらける情よ

法卯玄治医を以て名よ仕へいつ〻町けんや店ら法仰ら伝あり百なるを

異称日本傳を瓢公本倭人也　初以瓢渡海而来故号

ひさこをりと瓢の名なりし水をくむ笠よつくるまろ長笠の形なるなり

を木りてつくるる柄をひさこといふ〻瓢をなりひさこといふ　みのと

水をくむ笠の形ゆ出て瓢をよりつくる其女末紅うて今の世よひさやと

いふらひさこの部うなり

ある書を摂南今宮村ら住古医厨子所〻日ら供ゆの料の魚を調進す今

正月十日よハ上巳而様ゆ所執柄家〻鯛を献上す西人大紋を著し村長

さ〻添ふ肉すな祇園今の例きをえん大宮の氏輿を今宮より加輿丁をつくむるき

をえ今ハ後泉院の所例をすの又元孫延宝の氏やらの祝りよひやゝをを

出せう帯蓋ふらををるをるやみのあゝ号ゝ人よ益あるをのを　帯佩

とて珠脱す今ら氏やゝをんをつくゝ氏やゝの祝りよ形氏ゝ考人す

夫木集　夕顔の実さくもうしさたををさてゝき世のるを考られ

夕顔やふくゝ屋やまあゝ　居うあ　万子

夕ゝをのさけるを　遠き　使こう郎　幽子

夕色よ　ゝ　色さくなつゝ　酒

夕影の花見の花や　油　賣　生りひさこ　許六

雷と一なるふくを　この郎

夕代のふらうをるふくを　この郎

針立う　拵くているふくを　ゝ

周信の瓢の盃ナ

[illegible]る一体入のあるみこ[illegible]　其角

[illegible]人大なる瓢を二つ[illegible]て盃とし[illegible]地ひの
[illegible]内に[illegible]ぬて口を付るをかたて白とのもむ

清水影　李白の面影かくしかな　其角

花盛ふるさとふるみるも人とあり

瓢之銘　山素堂

一瓢重貸黒山　自嘆　彌箕山　莫慢首陽　餓這中飯顆山
顔回のかきもの[illegible]るかゝみ[illegible]るあ[illegible]惠子のつ[illegible]種[illegible]るあ[illegible]で
我は一つのひさこあり是を[illegible]みよつけて花入る笠せんとすれハ大
[illegible]てのりあ[illegible]ひさこ[illegible]酒をかんとすれハかたちなる
[illegible]ある人の白草庵のつ[illegible]き糧入つきりのかたと似たゝ[illegible]ある
[illegible]やうに用て隠士素[illegible]を[illegible]

有り記す其名を山をもとめ[illegible]故に四山[illegible]中[illegible]飯顆山
老杜の住る地にて李白の[illegible]あり素[illegible]李白の[illegible]かりて我
[illegible]貪を清くせんと[illegible]且[illegible]き時は塵の笠となるゆゑ一壺
[illegible]今を[illegible]山をかくしとせんるとうし

物のかの瓢を[illegible]　我せぐる　[illegible]

室町殿日記に功徳水を瓢箪に入なとあるのをたんを一箪食一瓢飲
[illegible]出る文字[illegible]て唐土に瓢箪とつけ[illegible]瓢のくきく種類の共水
に隠[illegible]るの池の[illegible]きたるよ[illegible]ハ瓢よりも瓢よりも和名あぐ[illegible]の
[illegible]の越氏の[illegible]て大なるものを瓢とえ[illegible]と細腰のものを壺
壺盧[illegible]修[illegible]せんの瓢の[illegible]て九[illegible]短柄のものと壺[illegible]
瓠のかたちの[illegible]で柄のもきのを懸瓢[illegible]本草に苦瓠あり語
る苦瓢しい[illegible]其味膽の如し詩に苦葉といふ物是なり和名にふくべ
瓢ハヒサゴ　箪ハタケカコ　瓢とハ自ら別のものなり
夷曲集　貧乏の神もなこむや借銭いりくるの日の晦ひに

示二秋ノ坊一辞　　芭蕉

あゝ秋の坊やれそこの秋う世の秋又〻秋の坊るう見ハいまく古けこるを、
みなうう好奇をく人のゆまあて稀を一物もなきまの也昔湖南の幻住庵ゑ一枝乃
芳をむすひ〻ゝ長好るを見ハまみ〻やすらんゆ常迅速の一句を
あゝを先作る蘿迂おろハゆ中さんし〻今此草庵ゑ面〻ゆゑ孫今るる
法師ハれ住て侍るう物いなゆ日の終日も侍りてかく住るゝをあやしく
るとけ色をみうるまあてあそいう伝某ゑ三十ゑとつゑ歌よみうるあらんを
この人〻ゆ笑へるゆ秋の坊う白俳諧をさるるゆんう日定む一〻ハ俳
諧ゑくつ〻んと せい世情ゑ義て心の花ゑくつろひぬて花をきいみせろ
風流ゆ せうゝ〻するすみうんを法師達ゑおきてハさるるゆんゝ
俳諧ゑあゝみて俳塔をゆまで〻ふ〻ゝ志あてくつ〻んとせい東花
坊うゆきを世情ゑうきゑとうを俳塔のるゆを俳ゑふうのくゆんや

俳諧切記

我ゑゝ三つゑゝるゑゝ　ゆ塵切記
ある時秋の坊湖南の幻住庵を訪りる
我ゑゝ坊のちいきを徒を　芭蕉

かて一枝二枝の伝奉りハ芭蕉常迅速の
白を志ゑて ゆゑ迂ゑおくるゝ
やゝを卯あけ きハゑを ハ 蟬 の声　芭蕉

世ゝ〻すゝみうんゝ
白氏文集　匹如身ノ後有荷支　應而人間無所求

秋の坊う行脚子
ゝく起て茶をるゆ　秋すゝ　李東
小揚ゝ ゝゝひを名をるすゝ引　秋の坊
月を田つゝ波ゆりそふるあゝ
凍つをハ凍つをゝ　笹の波　、
ゝゝ　まよをゝあゝて ゆ引て　、
四月四日

四月四日李東ゝ方へ詩
ひ白ゝを ゝゝみ ゝゝ

四月四日

四月四日李東ゝ方へ詩ひまて好ひゝ我書つゝゝゝ
ひ白ゝを ゝゝみ ゝゝ　、

秋の坊か老母追悼　牧童

身のゝきる手を立ちるや焼さゝう

卯の花ら誰おもかしも志なしけり　秋の坊

三夜一餅の[illegible]のくゝ[illegible]すく

[illegible]とも[illegible]

[illegible]ハ山[illegible]人[illegible]

[illegible]かてし

[illegible]ハ山より[illegible]人をそやれ

として[illegible]

読法花経

其時よ[illegible]の竜女[illegible]提婆[illegible]

焼[illegible]一夜の[illegible]西ふし[illegible]

秋の坊か[illegible]　秋の坊

稲つ[illegible]うせ[illegible]　秋の坊

秋の坊[illegible]　李東

示ニ僧ノ古鏡ニ辞　東の由

[illegible]の僧あり古鏡といふ物を[illegible]して東湖の傍に於て産ら濃州関(セキ)ノ

[illegible]ハなと志津孫六か鍛(キタヒ)をなす紫電白虹(シテンハクコウ)赫(カク)としてゝ三尺の光を振はざ

るや天下誰ありて敬する者あらんさるハむかしの釼今の菜刀とおなし　後成郷

の花の鏡もおくらの今ハ宋村の篠律なら[illegible]

[illegible]の鐘鋳の奉加通具なきハ[illegible]

年をへて花のかゝみとなる水ハちりかゝるをやくもるといはん　家隆

[illegible]のかゝみ花もうつらぬ

咲[illegible]の花のかゝみとなるらむ　梅の下ゆく庭の遣水　顕輔

梅かゝやまもうつらん[illegible]よき玉[illegible]川の花の鏡[illegible]　定家

花ともや曇るてや[illegible]かゝみのかけも雪と[illegible]らん　秋何

名銀冶古今銘つくし　志津三郎兼氏　関孫六

漢高祖三尺の剱をふるふて天下を治となり

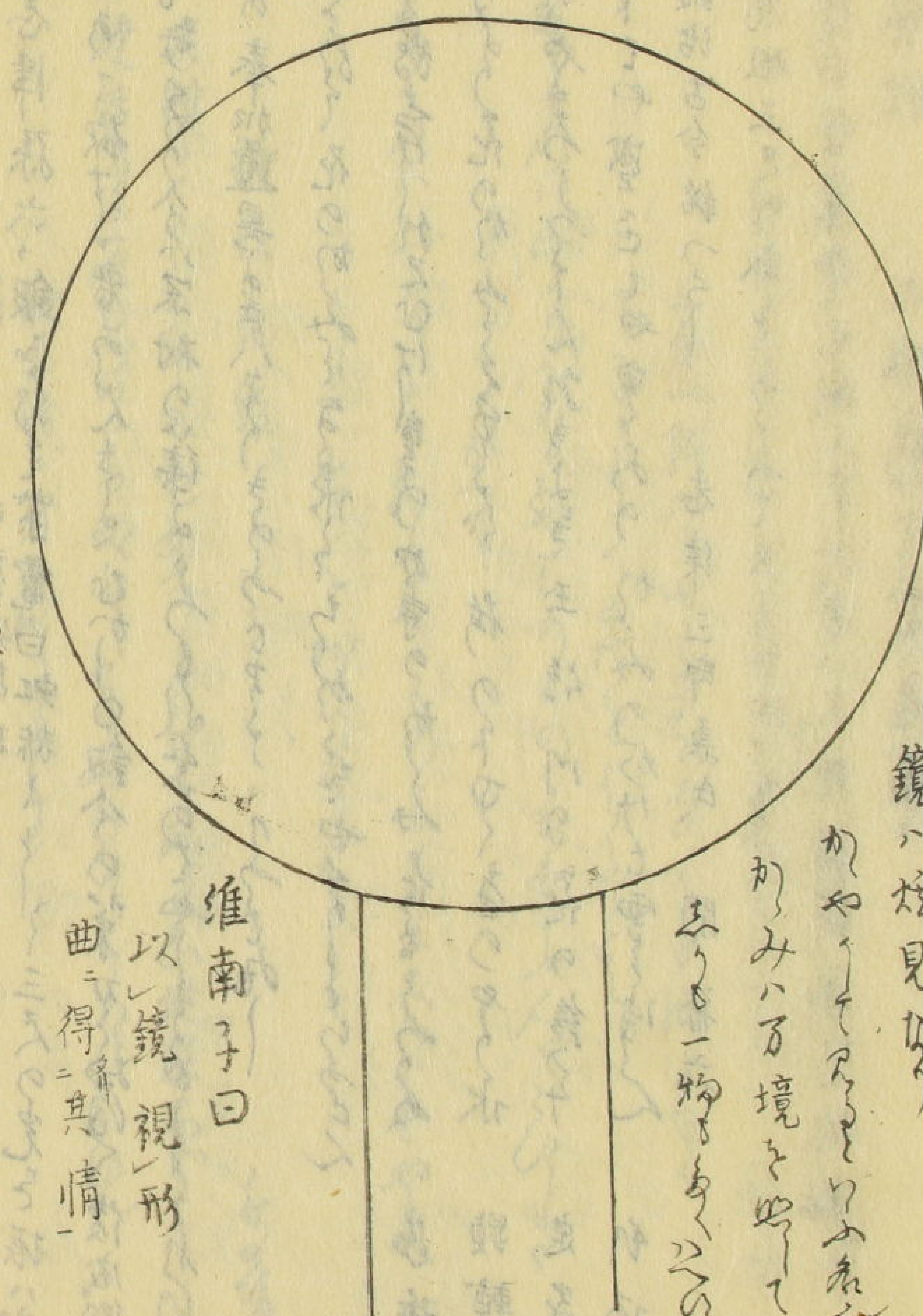
異苑曰晋恵帝元康三年武庫ニ火焼(アリテ)ニ漢高ノ斬白蛇ノ剱一

大風歌

大風起テ兮雲飛揚ス

鏡ハ炫見なり

かゝやきて見るといふ義也
かゞみハ万境を照して
あらゆる一物をあらはしては



淮南子曰
以レ鏡觀レ形
曲ニ得ニ其情一

此人かつて詩をよくす多情有声の画を称し無言の詩の妙をあやつると云
る猶風雅は是をそびて数寄の道をさぐり一とせ先師翁の旅の比

まうでて一棒をうけるといふていまだ法席をむすび今年此寺に参して又
鏡を磨くもむかしの風雅をわすれずあきらかなるもの之鏡の物のかげをうつすが
如し此元来磨くことを志しは速に志つて水銀をもとめ来れ

分別は花の鏡かな

得古鏡傳不知

鏡のちなみにいふある邦の
ならびに何とかいふのくに〳〵に志すに附て鏡をそへる
越後の松の山といふ所に昔鏡といふものを志らぬ時のことなりとかや
るすみに志るにあるひとりの女鏡をもとめ傳へて世にあらひる
くをを秘してくらすなるをある時かりそめに母まかりける時此鏡をひとり娘
にゆづりて娘又鏡といふものを志らざりければ彼鏡をみてたゞ己が
かげのうつりしを我母のわかくなりしをみるとて住のくるしさをやすめ
いつもみるに八せめてやとなぐさみけるとなむ

難波集第十八　正月一日よみ侍るかきつけせしける

あらたしき年のはじめの鏡には

天暦御製

よくせの句に句をかけゝる　兼良女卿

四季のかみ草　春ハ大根

りうより出てあちのかみ草　さかえ栄るかけをしよ

夏ハまつむ花

夏めうち水にあてたるかみ艸　只さく花の色をうれしき

秋ハ顔

朝皃ハ仇なる花のかみ草につゝむ袖ハなきを

冬ハ松

冬のうちハ月も籠来るかみ草小松のかけを志けりける

本朝文鑑　影法師對　桜木問

誰ゾ何や忽然とその曰白髪を清めてえはを待あまは汝何人なれハ
あゝ白桜下に来り我と對して坐するや彼曰白髪を清めてえはを
待あハ汝何人なれハ我白桜下に来り我と對して坐するやの曰彦おのれの
七歳迄やかくなりし昔より我ハ白桜下の主なりて白桜下といふこと
るや我いふれを彼いふ我笑へハ彼笑ふ此ハなるち漢の棠陰比事なか

あえ成侍の板倉殿の捌きなるもんの昭明あり実は我
反ハたり已のり跡を着せしを右已らりといゝて論みてた
り我又我心をせめて曰一諦に勝かうて見を解なうとおてやや其
而詮をえるに只暦よ骨折らせて意識をあめせるる近なれとて
や隠士の境界ハ世俗の利応をかれて内に千金の宝あり甚空
とゝふるえりや一の秘藏乃ままに別

五元集　この句ハ入らく

きゝめて吟んん　跡云ゆしき去りたる　其角

あくしくに嘯吐くん　かくすゝき、

志らあくる鏡の色乃まこつ柳　九節

宗祗自賛

ようしむ念別れて世のうきを去なる　さそらやまひなる

人ゝ命に東かみのかちねこつ子　為九光磨師

贈二新道心一辞　丈草

世をのかれて道を求るひとの人ゝ皆一かどの志を發して誠をつとめ
ともあつかひと本を重ぬれハ又かんらいよひろうて係縁に引るゝ志けくな
りてさまよはしめの人と思も見及ぶる其心のこそおぼつかなき人を見るも
悩ましめて出家以後の出家を遂て〳〵すゝめをけるぬ　魯九子
をみのゝ蛙の山里にあそびていかなきさこのむ數の縁をや
織の墨の袂の深くてちりのすとうをかけ出山里にかきとむるは
修行の今の心さしの哀れにて後のちの出家をおこらぬさき白のふ
とを休ゐひて搗き辞をやおくりぬ

好たる奉て又侍る事あり春の月

出家乃後の出家
花山院も此出家の後悔させ給ふ菓花物数よ入給ひけり
韓退子詩　與其譽於前　孰若無毀於其後
紫也こんさやう
一坊主まする魚をとく　一地獄へ行て鬼にまけるな
一大食をしてくるせよ　一念佛も申さねば極楽にも程すな

一佛法をうそをかしくも此歌をみよ
皆人によくを捨よとすゝめて跡をひろふハ寺の上人
禪林類聚巻三
世尊纔生乃一手指天一手指地周行七歩顧四方云
天上天下唯我獨尊　雲門和尚云我當時若見一棒
打殺与狗子喫　貴圖天下大平
釋尊迦葉佛ニ傳法之偈
法本法無法無法亦法也今附無法時法法何曾法
阿含經云佛告比丘四大河水入海無復本名同名為海四姓
子於佛出家剃除鬚髮著三法衣無復本姓但云沙門釋子
あをさうり地までさらりと柳かな　魯九
ねばしらのころふ附あり夕あらし
延よる脱より細し廉乃声
秋をやまをたすれるとふつゐ

嵐蘭

燒蚊辭

蚊帳中の蚊を燒く辭をもてす汝が辭を少時ハ我も汝に死なんとす
らつらくらくとせよ夫沃雄を樊中よやくなるふんるを待つ汝と彼を心
をとる是ハ食をもとめて人の肌よせる彼を生せむや是をすくまんや

莊子曰澤雉十步一啄百步一飲不蘄畜乎樊中

沃中の雉を十步ゐてまさに一啄を百步ゐて將よ一飲を得る其
飲啄のかてきをいふなり蚊中よりかはんるを則飲啄のものの
なるを為も雉の為よ別なるなり

きくを草よかうきて此のうめ蚊やる汝を帳よ入て帳のうめよやる
あるを為いつをとらせむや

雉ハ死ゐ夫の如くすゐをる往て地よ入る故よ篇矢を加へう
雉飛如矢一往而墮故字從矢

白氏文集

林靜蚊未生池靜蛙不鳴景長天氣好竟日和且清香

春禽餘時夏木新陰成

蚊蚋ハ蟄ゐ夜ハ出一名白馬暑蟲化生于木葉及爛灰中
為子子生蚊亀鼈衰之螢火蝙蝠食之
草花よ為ハ化とハいふる故ようめうんもハ出る柳のつう
校よ雉ゐをつ山を居ゐ為ゐ時よ為ゐぬといふるいせ
ものかうよ化をうつうるにや
我さのむ居ゐあをを為ゐ時よ化ゐるものを有ゐる
蚊帳の中よ入を蚊ゐをもちけハうゐや雨よ濡れ寒よ為ちてさ
をゐ化ゐ風さに化をつ山けむ王の緒のゐんゐるをいく偽ゐ乃
扨や獺み来ゐ汝ゐ蛍をゐ何を情とせんをゐの逆為ゐ去ゐぶく
をく須山小宮山ゐ扨討をかゐて謀をゐをといふゐ天下のゐ
して名おのつうをうゐ又汝といふむや

袖中抄別部をつをさせゐ世語よきゐ化ハつき
をせかぐをひろんゐをとうかぐゐハきぬ布のやゐて行ゐを其ゐをを
ある書に波字とつよゐあり一つを機を皆人の知ゐるゑ一乃を
服のうををもちて布帛のうハの織ゐをるものゐなう

源平盛衰記に二月十日の曉九郎義経鵜の尾を先陳として
一の谷のしろひよりの戦に向ひ中宮三浦介義澄仮家十郎
みな出で將軍の御うしろを固めたる一ツ立てても侍軍ナ
れば三ツ立てもあるべしやある義連先陳仕るべきなり
つるのうしろあるべしいづれも一騎まさきかけておくれ出るものをうん
ものひよりつくるとするものつはものとおもひ知てこそ
鵜の尾よりけ作るる　花乃友　法德

和歌

尾上つき丹波路かよふ乃の鈴代のをさ逢ふ坂のこ
りて鐘掛れのそあるする一の谷内裡屋敷目のあるを其代のみ
さ女さるのうつゆ乃ひ侍よひて二位の尼君皇子をいざなひ女院の
は裏よはあしもれ舟を形よあるひ入せるみあるる内侍局女嬬
夢みのうつひさ面くの山調なるてあつふ琴琵琶なく声絃ふんよくみ
て形よなけ人供はをこかれて鎌の間とのり稲の目ら知て海士の捨草とう
いるる歳のかるひ武蔵よくさろ素浪の音ようさ然なく作るや

一の谷の古戦場ら天くろ西るる白ら旧鬼哭する声物すく哀盛う旧
跡ら十ちの春の花將千歳ら泪をそそけり

元弘元年九月九日戊刻陶山小見山板討うるて笠置城放火日九日没落

屋(ミヤ)葺(ハレ)ハ頼(クハレフ)文をさけ日本武尊ハ夷狄をのれのふ共ら天ろて海とつくきるあ
れ大盗あれ樞戸(クルヽヒ)を穿(ウガ)むや海ら為るすふをろ戸に恨をくす時ら其の翻(ヒ)のるを
くくひ盗(ヌス)ろて紙樓のすきるをくつ○すて小破のあをりあ人のちりくす
つきて入ん(ア)とそろる嗚呼(ヤキ)跖蹻(キヤク)の徒ろく　あ

屋葺ら文かくるるる母かるしまかく系傳(オ)吾心を合せ弟を教さん
るある附ら井をろしめ土を下して先を埋んとあるる附ら　廩(ク)を
めりめ火を放つされるる弟謀を以て雑をきるれ兄て弟を恨
され昊天る號泣て父母の我を先せさるるを怨ん　せう孫る孝
をつさん〜八名教をやめむくをせしとなり
弟の妃　姨皇女英の二人弟を寸ふ共泪を深くるる傳物志るあ
日本武尊るのはるら冨士の賦よいろ
跖ハ魯の盗跖　蹻ら楚の荘蹻　二人とるる賊なり

原本 跖ノまへタツトヒカナヨ分タリ 跖セキト改タリ

盗跖ハ柳下季の弟後章九ヨ人天下を横行し諸侯を侵す人の牛馬を
かすめ人の婦女をとる多欲の死を忘れ父母兄弟を忘れ
すて祖先おとなうこと有ず所謂是人也ちうもの也ハ
ちうのもの也ハ
蚊蚋帳中の蚊蚋をやく仁侍をもてハ海ハ辯をきくけ
ちるこゝろ

るや 泣むしろの母も坂の姿む

一万葉集 おろかなるも今ハまうらむるもうらむ甚るの死もまをまうら
紀右曰人始生嬰子と云ふ 的の前を嬰と云ふ 兒を嬰ゐる
抱くを乳養する也 嬰と云ふ

避坂 雑 宗因

ちらくいけるもの心をんはあるくしの墨の息ち青雲天上の
ゆり坂のかを声々貴人の臥上よりあるゝ心の中ハ山はいとゝ大鋸
屑ふすて撞を入て紙帳の中一首の俳句ふうとさう

ゝゝハ大すう笑ひ大ちう又大鋸屑さゝゝゝ
坂はすしちう詩人をくゝひて桃の枝唐の坂
唐の坂や人の帳よこうしてやせ柳こ似ちう
美人の帳ハ枯くる 菓 ゝ風草 紫雪
唐の坂や人のうの乃ゝあ坂をこのゝ
坂の声の赤むを翁ゝ 軒乃雨 伝德
魚の骨 大鉢ゝくさき坂をうの 風洗
くゝうの牛ゝうゝ義坂こうゝ 孤屋
坂の声ゝもまゝ手ゝ 衣 一童 泥風
愛ゝうゝの坂のとよひ歩の川辺ハ 大柳
春ゝふゝう 敵ゝつけや 桃坂を 青女
魚をゝらし 坂ゝ おをりの 坂の婦さ 春草
坂やう夫 ゝよゝ乃ゝあゝ

撞は 芸角

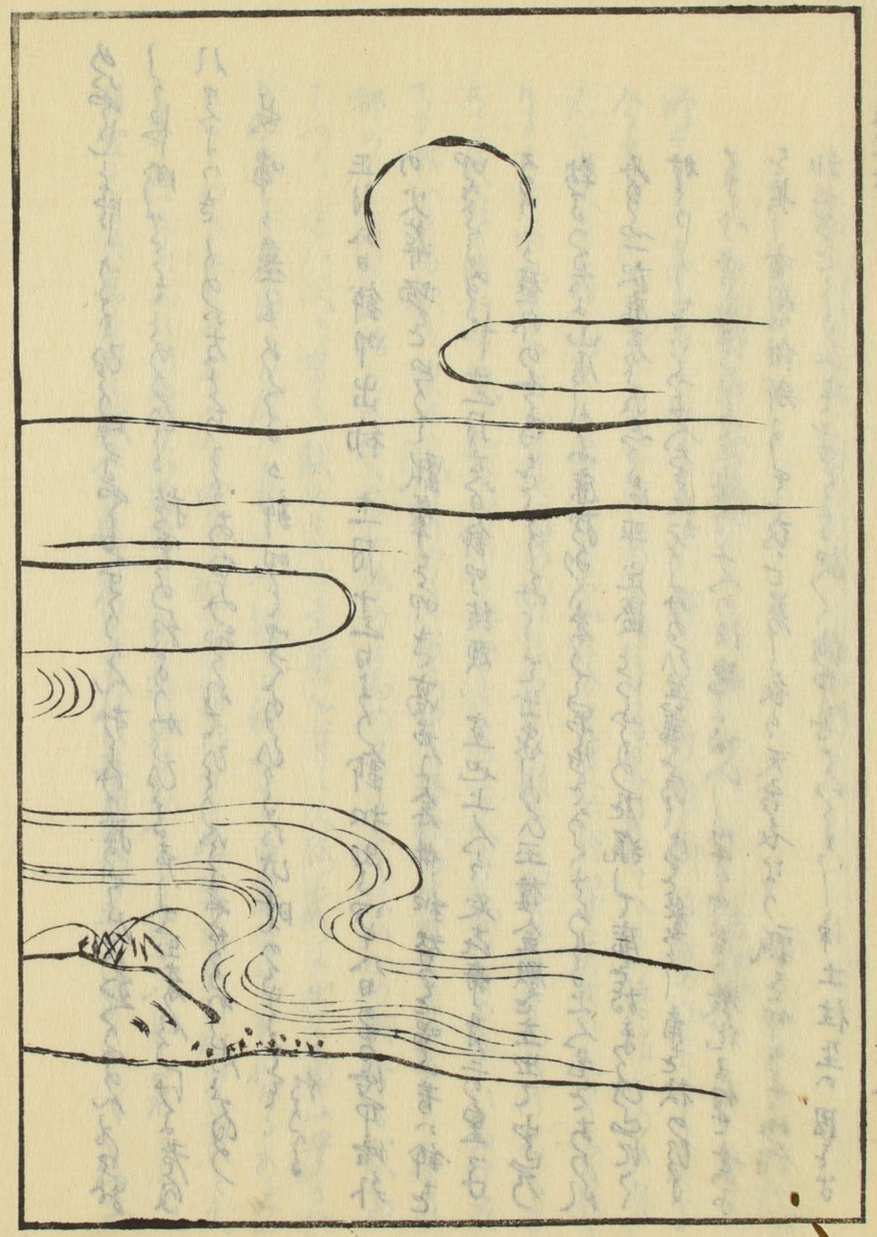
撞 代ゝゝて西日の和果ちう 一名坂ブス 坂ふす人の下男ゝ

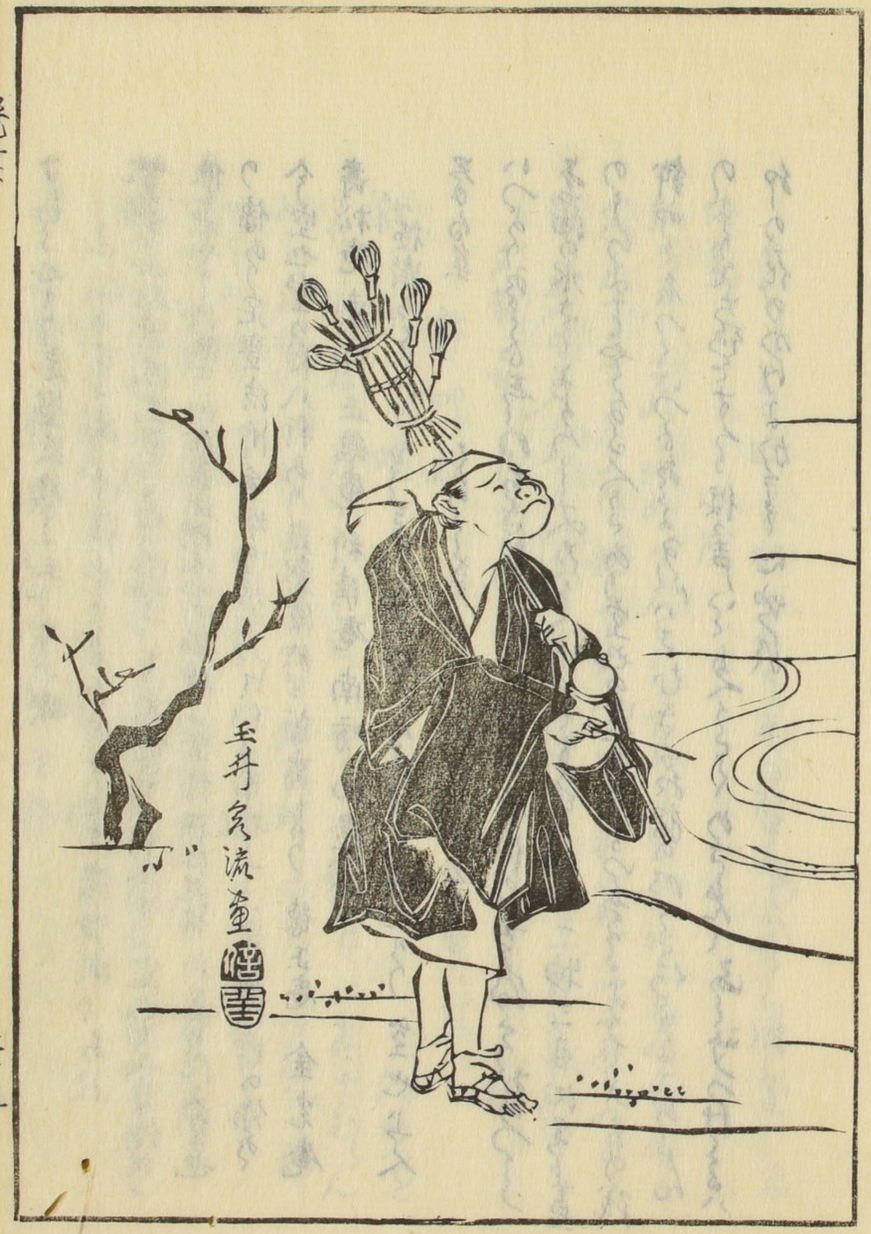
くいくの落を拔きてよく拔を避く

鉦和ノ解

玄来

[illegible]二十四日あさかきりの[illegible]八鉦[illegible]さゝやむと例の翁のいつもまつ[illegible]る
今宵も風さへ[illegible]く雨も[illegible]てとゝ[illegible]も来ぬ[illegible]いと待佗ひめひな
んといふうのおもひて　第[illegible]きも似てもあせむ鉦和と庚吹の弁ちもの[illegible]く
る共戸ぬ也夫宅を出よと母のめ[illegible]めつかく拾あひ[illegible]ふしく[illegible]く
あ[illegible]彼ら傾行ら紙さんを吹[illegible]鉦和[illegible]こ人と[illegible]つ[illegible]ふ[illegible]かけ合
る訛ふ甚唱歌ら空也の化なりかゝて寒の中と春秋の彼岸ら登拾とう[illegible]
都の外七所の三時をめぐりぬを係の[illegible]の[illegible]ふかの[illegible]春ら我家
[illegible]つゝとハいつ常ら拔のさんよ系登をさ[illegible]大阪[illegible]より出て南み業ら八
[illegible]めふとき無用[illegible]ハ[illegible]ぬ附ら鉦叩と曲翠ら[illegible]さ[illegible]る[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ




玉井定流画

すもろこし定盛法師と示しめす歌

山河の末よ流れく柳売の多を捨てこそ落和尚とあれ

紫雲山極楽院光勝寺空也堂と号金仏宗して本堂ハ空也上人自作乃
像を本尊とし脇士地蔵昆沙門也中の脇檀上に坐像阿弥陀仏行基の作又空也
の像あり定盛法師香炉の座を以て作る南檀上ハ定盛法師の像
今空也堂の内八軒あり定盛法師苗裔なり 徳正庵 金光庵
寿松庵 東坊 正徳庵 利清庵 南坊 西巌坊

極楽をそなたにみるそなたしらしらとつとめていくるあくるそ 空也上人

巻の集 長歌

そなたにき

いつよりかそなたにきぬるきなりひさこの笠持仏の異名なるおのつ
玉泉の水さしよりしゑ花をいけてものをもる一物三月にそる蓋
のうらよりやるる人をあり空也の遺事といふるよりてはものの残
鉢叩と名づくいつよりかそなたハさむきおのれのゆくこゝ行るようあるん
のしりをちをする彼の声をもくるくるくるくるさんてふてせつけるハ
仰の花のかけよかくも心地ハ

そなたにき暁なる時一声なるのあるくよりゆくゆる

日集 心成

紙のうくまめる物あるくてそなたにあれ笑ひる
やうれやすくさくハ名聞親ゆなるうえとひて則仏戒といふ者をつけう
おのくそなたにうへのあるかうくるせ捨人うれをを一目ゆるひ出う
夕顔よなるくそさぐれ上人を仏のこゝやあるんくれ

鉢叩歌 雪其角

鉢くきく 暁なる時一声に そなたにつかをを
花をそなたにを 雪をや鶏を あるさむんん
おりろやけ 樽たくき あるさめくるぬ
世をおろけハ しのくきく 気のちくうる はのくうく
七十たるまで 稀なると やつこ道心 ゆくそなたく
酒をかくてん 樽くくき あくうくくう 樽叩きやる
ひて死ぬ分乃暁や 樽くき

是者り艶 詞 そなたにゆ唱歌

梅の花盤其侘しむすふ ちるひハさそふ咲花の菩提の教へを

那須ハ雲水の世を是深の色なる ナムアミダブツ

池の蓮の世を蓑笠の著て三河の吉田の君とあるつまもよ

ひとしきはるの晴よ衣ふん ナムアミダブツ

月のひとりむかふ人のなしとも乃種瓢 ナムアミダブツ

霜の多くよ音をそうるもなるやくたちなるきぬのつれて

かりる家の花めきあしくさてひとつまのとよいさひつ ナムアミダブツ

山暁の一声よそのおもてるくはるあるあれいさ少む

ゆ人をもかくきにしなるそちくくよ

木下若狭守勝俊八金吾中納言秀秋の舎兄なり後弾正の東山

霊山よ蟄し和歌をたのむ長嘯子み天哉翁ゆ紀行

巻白集　山家記

小坂山の梅よ蘭若あり勝持寺とかける道風ら額あさやなり

方丈のあり西行ら梅ありといひつる老木の梅あり梅のとる枝

さすらふ春を多なる心をくる首ゆて清涼殿むかし誰

すみ〜咲のそらのさそ松とてる塚やあり那ら八我かをるるおさめ

よといふひ来のかくみるる志のいそやと花の木を梅つ木立ものふる大

きやうに雪ありけりはるくむおりかけるさん世近あしきなるふるも

あるくるるとちきりをくひとう芸ら物るるをくし下畏

長嘯子慶安五年六月十五日卒

七十五歳　延宝元年七月

歳人歌合

むかし人きけくをを紙軍の志はくめるる日のおもあつ

朱やらな我おをつくく　鉾　叩　湖春

おりろやあくあ　田軍

月雪や鉾　叩き名ら甚〜遠　歳人

もくくあきめハやどくちくむ　其角

婚入の門ゆをこそ　ほちくき　許六

出雲ら水音せくこそ　くちくよ　智月

多を移ら下陸はくるの　鉾　和　水花

くちくき居ゆの雪ををさけら　工門

納豆きる音たかく鉢たゝき　蕉
臘八ちかとゝろゝそ　ちちろなき　太通
親もなく妻あつまりて鉢叩　紫雲

刀奈美ゝ引

既中ゝ後考るつるあるものけせゝ霜月十日の夜なり其夜ゝと
に定りしゝる歳雪の妹ゝるゝ先たきなる酒の烟ゝゆゝ懐ゝ
柿舎をゝいゝ入ゝより先たきなる酒の烟ゝゆゝ懐ゝ
しみあり四方の一時ゝ集て芭蕉翁の事を語ゝ笑ゝ嵯峨のそなゝ
幻住庵ゝ所ゝ深川をゝ引ゝ清洲川のちゝ月をゝ引ゝ雅ゝの
は評ゝ芝居の狂言ゝ踊ゝ踊ゝ踊

世の中ちうしのようなるもの　西白

鉢叩いうたうき世を捨せん聖　知波

ちちちちき　女ま　出るあつれん　其角

迷くの恵物すせてちちき　許六

狐ちちきくや　狸の腹つみ

ひちちんな　井ちちちちちき　為有

ちち門の　井ちちちちき　大草

根を送ちかちちの　鉢叩　活圃

めし附やかちちちの　鉢叩　路草

鉢叩　手紙　妻をすちちちの　馬莧

行年ちちき人のちちや　鉢叩　文潤

ちちちき　渇仏の戸ちちちちの　風来

物ちちちつちち　ちちちちち　去来

其ちちの　熱ちんちちちき

鉢叩　出ちちの　知の　笑ひ類　生秀

先師空也の庶の面影ちちと大徳建立ちき

中ちれしをおりひかて

月洗や空也の鹿も　かへちち　風来

かちち結の空也の庵も　宇ンの内　為

白えず

弘長寺とちちあつれや　鉢叩　蟻通

仔牛ちちと似ちち　識　ちちちき　其角

一と世都ちちの夢のおもをはるかちちちつたに暁とまつひちちんの音

かちひて西ちち訊ひるを酒の香ちと口ちきる當坐の第　こせちち仏ちち

尺せむ鉢叩と長ちる其のちはるゆちる人ちちとあつれやちちひ

ちちしちちき暁のおもひ　自白中教行の信を起て彼う一

流の音声のちちのよ仏ちちの音めきちれ八ちめきちる白他りあ

心ちちちちちちいちのひちこちを呼して和仏を書ちちちむる

人の感をちちち

四季ノ辭　　辭六

古今和歌ノ文章ニ謂ル四季ノ者多シ矣假令安ハ用ル俳諧詞ノ
為ニ其情ハ和歌文章ニ不可更ル今此辭ハ全篇以財宝
之上ニ盡ス四時ノ情是誹諧也

行年乃　盈ル　ちゝ　元の
隙ノ駒　休する　時ゝ　人ゝ　行通ふ　やうに　めゝ　老
ゝの後　ゝ　光陰　たゝ　ゝに　徑路　をゝ　きゝ　ゝ　五十年　来　ゝ　一
杯の　ゝ　ゝ　ゝ

柄のて下万民の志く近千代万代と十かつてあふき奉るべしや今ゝの威
徳とゝ大判を縁て出仕し白銀を分基ゝて早下しるべきあるべし

金子の名　毋印子　花印子　大佛判　新大判　武蔵判　駿河判　京小判
佐渡判　大佛判といふハ大閤の時　後藤徳乗　相極め　極印の裏　徳
乗作也　大佛供養入用の為拵　故大佛判といふ　文禄四年　江戸
駿河　あるゝ小判拵立　先次判と書きて　かきそるゝを　武蔵判と
慶長五年　右量判　よりも　ひを　極印　ひや　作つけられ　此時一
歩判　拵　小判　歩判　慶長金といふ

銭　乾文の　多の為て　書く　一貫文を　ゆるゝ　こき　箸　蝋燭　一挺　きり　二
十五十の　年　迄　皆　お　迄　よ　そ　めて　ゝ　ゝ　春　宝　月　を　ぬ　人　ら　六　月　の
ゆ　ゝ　ゝ　ゝ

おくゝ吝嗇の情あり。おゝとおもてを吝嗇の情生ずる日のゝ通用の時代ゝ、
人情大きゝるゝ故ゝ戦用巡行ゆゝとうにて世間貧ゝ人ゝゝ今ゝゝ通用ゝ大ゝ今ゝ
の人情ちいさき故戦用巡行ゆゝゝゝ世ゝゝ貧ゝ十あのゝゝゝゝゝ八紬の用ゝも
かゝゝ千貫十あゝゝあゝゝ銭八座席の妨けゝゝゝゝゝゝゝゝ大きゝ異人其ゝ
ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ

今天下一統の代となりて此二流を是まで永樂一流のかうよ
銭四銭を物をあるようにあるをひろひ万民あるを
此由 上よりすべて銭一銭を四文一永樂銭と唐長十一年高札を
建らるゝより天下永樂銭すべて永樂 銭日よかけ 鑄物師
貫屋等の通奥にしるべくなる
銭を初徳といふ古きを清和天皇の代貞観十三年鏡屋神宝
の銭と既に貞観永宝といふ銭を鑄させらるゝ鑄銭司 山城国葛
野郡の鑄銭司と書あり銭を奉りけれ八十一月十吉乙丑勅使を
諸社につかはす 新銭を奉る其告文
所二鑄作之早穂 二十文手左馬助 従五位下多治藤吉手
差使天令棒持天奉出賜トゝ云ふ是古より銭を八木とする俗
こきばー 紙燭一挿 未木考
花の元 含香素艶欲頃城 山塔是手 梅是花也 詩
南錄に数の最上なるをつゝ唐長紀に宗盛の毛色雪の如くなるを
白象と名つけ今長るを誉の天元年に揚貴妃に与へ宗盛の

壹をさして宣徳の代つくる黄唐金なり小
仏を作りて宣徳の代つくる黄唐金なり小
ものゝ皆黄唐金なるべつくるべきなり
伊勢講の銀かりのを田るこの邪 新六
弁のみやたるけ隅の恵 大郎 、
題黄金 目ゝたるべ 一万数を花の春 其角
揚州崔 源氏 近都の空や 連 と 金 、
世の中のくの心花ゝゝゝゝあくあ春八日くよ長て田舎の今銀らすへて都の
あくゝゝゝ東西の遊ひの南の閑の寿りの丈て銭ゝ人と一生ゝすみかく
横ゝ四方山よ咲こゝれてゝ青空を花の名前と八ゝ賀六田の軒端ゝゝく重の雲
をゝけつゝん氏四山ゝ弥勒の代よつゝゝ世の人の西ゝとゝゝゝ
とゝゝなりやゝく弥生ゝくゝて時ゝの朱へき卯月の花おくゝゝゝ花星の
姫様の雪ゝ伊を卯の花とゝらやゝみゝん錫ゝ鉛ゝゝゝよ白銀の層ゝて
牡丹の花のゝきいさゝゝん世よ帰る紅とて長安の家家ゝとてあゝゝ是
よ魂をゝゝゝゝきる其西ふきゝゝる小別を桂て詠むるゝゝ雲青ゝ

奇流

[illegible]ものなる市なるて一歩ゝひろ三つなといひ
[illegible]たる買牛賣の詞して立つぶ十つぶとなるなく伯樂ゝ錢金をなるあるる
あつまりなる拉女野良のあるひ賽ゝ櫓蒲一のよう[illegible]と度なくゝ[illegible]のあるす
まるゝ[illegible]里ある[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ祭喰ひ祭すつき業を[illegible]ゝ[illegible]ゝ
[illegible]山[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

六月十用日入れめうを借す初中後三度借之はめうを乞もの之
白き松原紙書きぬるこの茅を胡瓜おすり京都の伝説
五十用にめうを食すれば疫病をやまひつかずとなり
紫雲寺金堂せんだん用色なく熱をさまれば文中に自注あり
やく宗風豊後の茅むかひの立てあり芋の茅あるうつくしく金氣世ておくるハ
きて星合の夜五色物後近つくこと草餅市花まつりの手鍛冶おおこと出
てこそふく奥の世の市おりのきを迎礼のりつくひ金の道ものを迎礼
別ならつのの家く近火焼捨てこと旧寺の小作棚近
こそよみあく物会酒のよのせやうこかけ合は一粒つみてかりこそ
うとおもくこと ありんるう矢くく生男魂茅を入るもてをうるの心
なる彼物多十八世日をかきうと定め世界の金銀を決附代里まこと
るるるドロ一夜さのかりの自分なの心くまりてこれるえうりの中方する
あるこあんハ彼かへこいるいうめをやこいまあるき日報をさく
いこうとおりつへき多をはまーき大神まうらく昆布手魅のあのひと

すんある八家を貧家智をこうてこうに貧楽の道楽人つまる百代諸
仰ありいくせう杜作魚浮の旅をこうやこ代秋きこうよ嫌於更科
の月をあて三長餞る多賞をこみ迎こ書るの歩を載るて尾花のつてまま
絵うこ加代後の下の草枕一夜二夜こうてなこれて長逗留る飽ふめこく
やく先の神の為ちこりこうなもあこうれこ

作京を京西条崖よあう接ふ所なう寛永年中肥前国作京一
接発動の附用くけ西くこうこうこうて作京と名つく作女の名京大坂ら
大天神小天神引船白人こう近こうの名之秋田ら作ら ち奈良ハけんこ
酒田ら柄杓おいやこうこん所浮出雲崎佐渡ら こき多石の巻南部の
迎いつこうを掛くいひこ鶏作ら如意ら作神寄ら あこひめこそ江ら
大観音小こうこんなこうの八女の名こ

作京を流ら流て こうこ巻こうよ

被八掃之垢離ら川陣のつまこう物を買てあこうひを出ひを掃ふこうや
被除の意よあこうこうこうこうを すまこいふ金清の意こて被の義こかこう
むかし春の吹羽衣ら形ここうこ発ら付合流行して年一度八十日ワ

かなまつり錢四文ゝくて諸宗迄の貴をうけ之をうり流行して
寺の吟ぜ人畫の手をうつこと忘れを神をうくせハすくなく京東
のちのんゝて十日サみ文と定ちゆうたあるゆゑ殺生をへて
貞代 天台を四門と云ゝ文 寺の吟かつて
山王の二十一社を四門の二十五文ゝ下なる處山
武西ハ八幡ゝ八ゝ百貫 此ゝ銭文よりなりしとゝも
公卒見 說 稱 作 おもおもの月おもの 詩 武
秋ゝをやくゝ第の前を立て黄々白々粧東雜とゝ彼も金銀を
ゝうやむ角ゝひゝ附ゝ有ゝをむる比ゝ諸家の卵ひゝきゝて名物の宝くゝぐ
風流を似て今づくの働きゝ霜月ゝ月ゝより野部の顔見世給分ハ
小判なり前ゝより京堺町と街ゝ中ゝ有ゝ天下の金とゝ
かゝてまふとゝ云ふ何ゝ武附ゝ師ゝ師ゝ師

[illegible]て新宅のみうと銭甲　ハ

千利休いふ処摺鉢うち飛来る日四へきハ日四へと風雅を共

事のあるとなり今第人万金をなげうちて茶をもとむいやしき心なり

天下の金をとりかへて　荘子曰天地為爐　萬物為銅

壽永ハ平家都落の年号ゝ

伏波將軍ハ賊を親族故旧より絶して世の人の集めるを守銭の奴と云

時雨ゝ時よりなくハ雨なり時よりなて雨ゝ則其化すみやかなり

其俤集　撩ニ山雪

年のうち金さくさせて　月下

なるのかきせをうれ玉かう　許六

夕立やうの金箔の死ぬる時

古小別ある世もあるきくの花　ハ

ゝ井の一歩をとゝ　其角

ゝゝの点料といふのハ共角より定るとゝ　其角ゝ油樽ハ

をあけゝ点料を入うとゝ

昔ゝ謝諧の点料といふものあり貞徳翁京師花咲社中にて屠の

時俳諧の百韻点をとるのゝ作せりゝ其句の名産ゝ乳

物ゝて上ゝなり　點ハケスト訓　滅ニ謂之點

郭僕註　以筆滅字為點　我をかりて改易を點ゝ

ゝ　太和ゝ連歌の点ゝ　播磨鍋いつきゝ長のつくゝ　宗鑑

ゝ　太和ゝ神代より傳ておのき主の歌ひるれハ天下誰あつて

ゝふをおさむきれゝ来の代よりあるゝて和歌の道ゝ物するものハ金也目ゝ

ゝ鬼神をなゝめ男女の中をやわらけあけきるものゝふの心をゝく

さもるものゝ是也上ゝらいやしきゝ

ゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝ人世界ゝて八一日の点ゝ

ゝ　ゝ

文意ゝゝゝ解ゝ　太和ゝ

事吟　勅撰　其

和歌の跡ゝゝ　出雲ゝ　八重垣　歌

歌ゝゝの　ゝ　ゝ　ゝ

勅撰乃八雲こゝあらんめくさに　斜六

中院通茂卿七十賀記に讀師　發声　講頌とあり講頌とつゝハ
講師のしゝろ坐す音曲のくあるひハ詠吟をたつけくる事者さそひか
りて、披講の歌をあらに詠吟するこゝろを講頌とつゝはしめ讀
師ひゝゆゝよみあけ呆て發声はしめの五文字をこゝに出るまよ
ゆて講師くゝふ講師よりて講頌同音こゝゝのなり
巻七集　山家花　新古今のこゝろひよりゝ古今他者のめつらしく
あるかゝくゝいひ出ゝん秀逸をもつて一文字なりといふくるゆゝくあ
すみおうゝ（てゝ）ゝ式道の死跡こゝる一しきて同時の事をや京極黄
門のかきをうれ一筆の跡誰うなみせんあるこゝろ也（一世の
人の歌よむを偽うもて上ものの名あり西行歌ゝあるゆゝく修行
めゝう道の海山を跡てこゝろ和の誠ようつ詞ゝまかせて詠つく
はゝさふゝおのつゝうるさゝ侘あるうのゝ
古今の姿のこゝあよあゝゝ侘のあるふ声のすゝきゝ
かゝくゝうんこゝ歌ゝよむゝのかゝきゝよあゝゝ心を歌ゝすゝるのかゝき

ゝゝ心を歌ゝなりゝゝゝのゝゝゝ

なるをもて運歩なり

古服今服といふことあり古へのまゝにていふハ古書を常よりよくよみて
て古代の風儀をよく見認ふる服をいふ今の服といふハ今の世の風
儀をあきらかに別て古代の風儀をまねび古の服をもち
て今の世をまねぶハ今の服といふ畢竟ものいひ言葉ハ今の服を
以て古代のものをまねぶハ今の風儀のいひまねぶ故よくきまりをくしも
解しかくのごとくハ古書を今百年あるハ煉金して秤目百両のまねるを今の
服を以てまねぶハ小判百両のまねとおもふて人古書をよむハ尾張の
よりあり物ゝ長さ八寸のきめん今の服をもちてまねぶハ八寸ばかりあるきぬ
とをもふつゝ（盃）とあるハ五分ばかり今の服もてまねぶハ糸くゝりのあるをもて
又古へかとあるハ瞬刀五寸より八寸迄のつハのなきものをもて今の服も
てまねぶハおかとあるハ寸刀を今の世にハ大小ともに長たるをおかと一
名ハカタナといふ是上下とつゞまりて行ふてハ上下一具なる服を上下といふ

但歟ニ愚者悦一不恩ニ賢者嗤一

風俗文選火註解 巻之壹終

御目藏板